



**Worksheet-based Educational Programs for Families:
Results from the "Rekihaku Parent and Child Quiz" Program**

小島道裕

はじめに

- ① 経緯と目的
- ② 実施の状況
- ③ 実施の結果①—全体的な検討
- ④ 実施の結果②—年齢・学年別の検討

まとめ



利用者の立場を重視しつつある今日の博物館において、利用者の学習をどのように支援するかが大きな課題となっている。本稿では、ワークシートを用いた家族向けのプログラムとして行った「れきはく親子クイズ」を事例に、その試行と実施結果から、特に対象年齢の設定などについて分析し、またその意義について考察を試みた。

試行は小学生を念頭にスタートしたが、実際には中学生および未就学児童も多く参加していることがわかり、種類や設問の変更を試みた。まず答の選択や記述とスケッチを中心とした問題を小学生から中学生向けに作り、次いで写真で示した資料を探す形式を中心とする低年齢用の問題、さらに中学生以上大人までを対象にした難度の高い問題も作成して結果の分析を行った。

今回採用した、子ども向けの問題シートと大人向けの解答・解説シートを分けた「親子式」の方法は、条件にあった層には効果が高いが、条件からはずれた場合には有効でない欠点があり、展示室での支援の工夫が必要である。また利用者はプログラムを自分の観察に合わせて使用しており、この点からもシートだけではない総合的な支援が望まれる。

このプログラムは資料の観察に基づいて答えを導き出すため、博物館利用方法の訓練ともなり、また展示作成者が設定したシナリオとは別の文脈で資料を読み解くことも可能になるため、展示意図を相対化し、主体的な学習を行うためのきっかけともなりうると考えられる。